

不登校への問題認識の課題

日本薬科大学 さいたま教育文化研究所 馬場 久志

30万の一人一人

(1) 30万人をどうみるか

このところ毎年の文科省生徒指導上の諸課題調査が公表されると、まず不登校、いじめの発生件数が大きく報道される。2023年秋には不登校小中学生約30万人という見出しが掲げられた。不登校児童生徒は2013年度以来増加の一途をたどり、この2年間は小中学生の合計で年に約5万人ずつ増えている。特に小学生はこの3年間で2倍、5年間で3倍になっている。

だがこの大きくふくらんだ人数にのみ目を奪われてはならない。たしかに人数は年々増加しているけれども、不登校児童生徒が大きな群れとなっているわけではない。ガザで空爆が続く犠牲になる子どもたちの人数が報じられる中で、我が子は数字ではないと訴えた母親のことが新聞各紙や

ボランティア団体から伝えられたが、同じことがいえる。子どもにとつて不登校は30万という数字ではない。

それどころか、増えたとはいえクラスで不登校なのは一人という小学生などは、皆が普通に通える学校に行けないのは自分だけという孤立感に苦しめられている。そもそも学校に行っていないければ、他に行っていない人がいるかどうかもわからない。分断と孤立感の中にある30万の一人一人がいるという認識が必要である。

(2) 30万人ではない

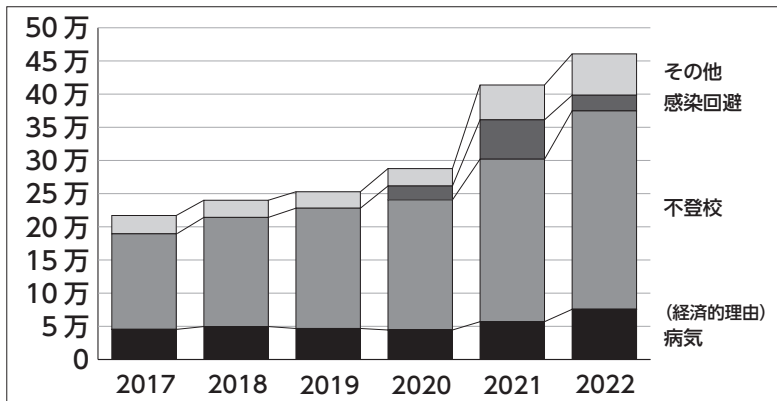
約30万人という数値が各地で語られているが、この数値は実態の一部を表しているに過ぎない。生徒指導上の諸課題調査では、不登校を含めたいくつかの項目から長期欠席というくくりを用いている。長期欠席には、「病気」「経済的理由」「不登校」「その他」という細分項目があり、2020年度から

は「新型コロナウイルスの感染回避」という項目が加えられた。この数年の推移は図1の通りである。直近では、不登校を含めて約46万人の小中学生が学校に通えていない。

このうち「その他」とはどの1つの項目にもあてはまらない例外的な場合を分類するものなので、さほど割合は多くないのが通例であった。この「その他」がこの2年間ふくらみ、それまで2万人台だったのが2022年度は約6万人と計上されている。新たに「新型コロナウイルスの感染の急拡大期に、学校又は教育委員会から推奨あるいは提示されたオンライン学習（オンラインと対面のハイブリットで学習指導を行う場合を含む）」に参加したことによって、登校しなかった日数が30日以上となる者」が「その他」として例示されたためと考えられる。つまり、不登校であっても学校とオンラインでつながった子どもは不登

特集 不登校を考える

(図1) 長期欠席小中学生の推移



(文部科学省, 2023 より抜粋作成)

校には算入されない。学校とのオンライン
 通信の評価は、個々の子どもからみて判断
 されるべきで、よい場合も悪い場合もある
 だろう。ただし多くの子どもたちは、オン
 ライン遠隔学習がしくて家にいるのでは
 ない。「その他」に分類されることで、不
 登校の実態が過小評価されていく恐れがあ

(表1) 文部科学省の2調査による不登校の要因
 (2020年度実施)

生徒指導上の諸課題に関する調査
 不登校の要因 (主たるもの+主たるもの以外)

小学校		中学校	
無気力・不安	60.4%	無気力・不安	58.9%
親子の関わり方	26.2%	生活リズムの乱れ・遊び・非行	17.5%
生活リズムの乱れ・遊び・非行	22.9%	友人(除いじめ)	15.9%
学業の不振	10.0%	学業の不振	13.8%
友人(除いじめ)	9.8%	親子の関わり方	11.9%

実態把握に関する調査
 最初に行きづらいつ感じ始めたきっかけ

小学校		中学校	
先生のこと	29.7%	身体の不調	32.6%
身体の不調	26.5%	勉強がわからない	27.6%
生活リズムの乱れ	25.7%	先生のこと	27.5%
よくわからない	25.5%	友達のこと	25.6%
いじめ	25.2%	いじめ	25.5%
勉強がわからない	22.0%	生活リズムの乱れ	25.5%

問題の所在は学校と教育

(1) 「原因」について

文科省の生徒指導上の諸課題調査によっ

る。
 加えて不登校の高校生約6万人は「30万
 人」に入らず、また例えば特別支援学校高
 等部の不登校生は統計もない。「30万人」
 を安易に代表語にはできない。

て、不登校の原因が多くは「無気力・不安」
 と言われ続けてきた。そこに2022年の
 協力者会議報告が疑義を唱えた。文科省が
 不登校経験者(調査時も在宅の子どもは対
 象外という限界はあるが)に尋ねた実態調
 査結果との乖離を指摘したのである。表1
 のような相違がある。

無気力や不安は、不登校の子どもたちの
 状態をさす結果であって、要因とするのは
 妥当でない。報告書でも、「無気力・不安」

を要因として把握するのみでは施策の検討のために十分でなく、その背景にある『外的要因』（友人や教職員、家族との関係等）の把握について検討する必要があるとの意見もあつた」と述べているが、もつともなことである。そのため文科省は調査方法を見直すと言明している。無気力なために学校に行かないという誤解はなくなるべきである。

しかしここで、要因の分類に踏み込むのは危険であることも指摘されなければならぬ。子どもが不登校になったとき、親も教師も原因は何だろうと思ひ悩み、子どもを追及する。だが原因探しはたいいてい子どもを追いつめることになる。挙げた原因を一つずつ消去していくと、休む理由がなくなり、登校しないことが責められることになるからである。経験者の多くが後に振り返るように、なんで学校に行けないのか「わからない」という子どもは多いのである。もちろん、いじめや病気などの早期対応を要するものはあるだろう。その点では親や教師が原因に注意を払うことは大事であるが、子どもに説明責任を負わせてはならない。それよりも大事なことは「学校に起因するものも多くあることを、危機感を持つて認識」という約20年も前の調査研究

協力者会議報告を真摯に受け止めて、学校のあり方を見直すことである。

(2) 問題は学校をどうするか

2017年に施行された教育機会確保法（義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律）は、学習の場を設けることを推進する目的をもつ。これによりフリースクールや居場所への社会的認知が進んだ面がある一方で、学習機会の提供を標榜する企業参入による市場化の広がりへと道を広げた。学校では、子どもが不登校になると、こういうところがあると言つて校外のいろいろな場を斡旋する動きが盛んになった。しかし問題の本質は不登校の子どもが増える源のところであり、学校をどうするのが課題である。そうした中で、文部科学省はCOCOLOプランの策定とそれに続く対策推進本部の設置を行った。

特徴の一つは校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム）という校内の居場所づくりの促進である。学校をどうするかに焦点をあて始めたのは前進と言えるが、校内とはいえ教室外の学習・生活場所確保を考えるものであり、教室内については「学校風土」という文言を持ち出したも

(図2) COCOLO プラン概要

1. 不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整える
2. 心の小さなSOSを見逃さず、「チーム学校」で支援する
3. 学校の風土の「見える化」を通して、学校を「みんなが安心して学べる」場所にする

(文部科学省, 2023 より抜粋作成)

の、見通しは不明である。

(3) 学習は生きる権利の保障から

昨今は学びという言葉が行政においても多用される。従来の教育において学習という言葉に知識偏重や座学などの印象が重なることも一つの理由だと思われるが、不登校の子どもへの学びの保障は、その狭い学習に引き戻されがちである。個別最適化された学習モデルの好例として不登校の子どもへの対処が取り上げられ、教育の市場化の組上に載せられる。しかし狭い学習機会

の保障にしか視野をもち、校外・校内ともに教科などの学習にとらわれてしまうと、不登校の子どもが最も必要としていることを見失う恐れがある。それは、子どもが安心して生活し発達する十全な成育環境である。子どもの権利、突き詰めると生存権の保障から子どもの生活を再構築することが先決なのである。

不登校の子どもだけの問題ではない

(1) 問題の当事者

学校では個々の子どもへの対処はあっても、逆に不登校から見出したことを学校の課題としている例はあまり見られない。不登校は休んでいる子ども個別の問題であるというのが学校や社会の認識であった。本校には不登校児はいないから不登校問題は関係ないと言われることもあった。

しかし、不登校になった子どもたちがかつてそうであったように、現在つらくても耐え通い続ける子どもたちも同じ問題にさらされている。さらにはつらくとも働き続け心身をすり減らしている教職員の困難にも通じるものがあるだろう。社会に出たらもっと厳しいのだと言って子どもに登校を

迫る親たちもまた、理不尽な環境に身を置いている。不登校によって浮き彫りになる学校のあり方の問題と同根の問題の渦中にいる人々は、広い範囲に及んでいるのである。

(2) 親たちの気づきを学校、社会に

ほとんどといえるくらい多くの親たちは、子どもの不登校に直面して、子どもを責め、そして自分を責めながら、後ろめたい思いを引きずり毎日を送る。一番苦しんでいるのは子ども自身であること、子どもも親も悪いわけではないことに気づくまでの試行錯誤の苦しい日々をたどる。そうした思いを分かち合える無二の場が親同士のつながりである。けれども親たちがつながる相手を見つけないのは容易ではない。学校では、校内で不登校の子どもがいる保護者の情報を教えてくれることはなかなか望めない。同じような経験をし、同じような思いでいる人たちがいるとは知らずに孤立する親子は今なお多いと考えられる。

そうした中で、埼玉県教委の努力は注目される。約10年前より生徒指導課と親の会、フリースクールなどによる官民連携会議を続け、独りぼっちでいる親をなくしたいという親同士の思いを反映した取り組みを地

道に進めてきた。県のウェブページに親の会の紹介「『親の会』ってどんなところ？」や、30人近くの不登校経験者・保護者の声も掲載されるようになった。これらの声は行政資料にありがちな「克服」を格好よく描くものとは限らず、当事者の姿が飾らず伝わってくる。

官民連携会議では、行政は親たちの思いに寄り添い、また親たちも行政の立場を理解しながら歩みを進めている。例えば第三者から見ると気づきにくい表現についても、「これまで『不登校についての体験談』として掲載しておりましたが、官民連携会議（構成メンバー：親の会、フリースクール等、生徒指導課職員）において、『不登校の経験についての話』の方が、適切な表現である」とご意見があったことから、令和5年3月から標記のように修正」という是正を重ねている。

学校や行政にとっては従来の自らを否定することもある苦しい過程だと思われるが、当事者や親の気づきから改善を図っていくことは、誰もが安心して過ごせる学校と教育のあり方につながっていくのである。その意味でも、不登校の問題は30万人にとどまらず、すべての子どもと大人、そして社会につながると認識したい。

「親の会」と埼玉県連絡会の20年

不登校・ひきこもりを考える埼玉県連絡会代表 伊藤稔

2年間の準備期間を経て2004年10月31日に結成された不登校・ひきこもりを考える埼玉県連絡会は今年で20年を迎えます。

会員の皆さんには『むらさきつゆくさ』というニュースをお届けしています。2023年11月に97号が出ました。表題は、結成以前からお世話になっている神戸大学の広木克行さんの『子どもは紫の露草』（北水2002）からいただきました。その美しい詩画集の「はじめに」にはこうあります。「紫露草という草は、放射線に触れると変色すると聞きました。住民の意思に反して原子力発電所が作られた地域では、そこに住む人びとが自分の家の庭先に紫露草を植えているといいます。人間には感じ取れない放射線の危険を、その草の変色によって察知する自衛のための知恵なのだと思います。この話を聞いた時、『子どもたちもまるで紫露草のようだ』と私は思いまし

た。子どもたちは、社会や学校あるいは家庭の中で感じる不安や危険を感覚の鈍った大人たちに代わって、さまざまな症状や行動で示してくれず

けれど、不登校の子どもたちのことを、「社会や学校あるいは家庭の中で感じる不安や危険を感覚の鈍った大人たちに代わって、さまざまな症状や行動で示してくれている」と思えるようになるまでには、たくさんの時間が必要なのです。それは、親にとってもそうですし、ましてや社会は、まだまだ「子どもは紫露草のようだ」にはたどり着けていないのかもしれない。

不登校をめぐる教育行政の対応

戦後直後は学校に行っていない子どもたちは100万人にまで達したといえます（1949年）。その数は経済と生活の安定のなかでいったん約1万人まで減りました

が、1974年からまた増え始めました。当時の文部省はこのことを次のように見ていました。登校拒否は子ども本人に登校拒否をおこしやすい資質がある、「不安傾向が強い」「柔軟性に欠ける」「社会的、情緒的に未成熟である」などの問題を持っている。同時にそのように育てた母親・父親は「未成熟」「社会性に欠ける」「自信欠如」などの問題をもっている（1983年「生徒の健全育成をめぐる諸問題―登校拒否問題を中心に」）。つまり、学校に行っていないのは、その本人と親の資質の問題と切っけて捨てたのです。登校拒否の子とその親は孤立するしかなく、親による子殺し、親子心中などという痛ましい事件も起こりました。

その後も増え続ける登校拒否・不登校に、1992年に文部省は「登校拒否はどの子どもも起こる」とし、「待つ」ことの重要性を指摘しました（「登校拒否（不登校）問

題について「児童生徒の『心の居場所』づくりをめざして」。これは、登校拒否は本人と親の資質の問題だとした1983年の報告をある意味撤回したことになりますが、学校や教育をめぐる社会のあり方は問われることなく、「適応指導教室」などによって、ひたすら子どもを現実の学校に適応させるという方針をとっていました。2003年の『今後の不登校への対応のあり方について』でも、子どもを学校に適応させるという原則は変わりませんでした。ただし、「待つ」だけでなく、登校拒否・不登校生徒の進路指導・社会的自立に向けて「働きかける」ことを重視するとし、「数値目標」による数減らし、「スクーリング・サポート・ネットワーク（SSN）事業」、「スクール・ソーシャルワーカー（SSW）活用事業」などが開始されたのもこのころです。これは、一時「高止まり」という成果も生み出しましたが、その後2013年度には登校拒否・不登校児童生徒数は前年度から7000人増え、約12万人に達しました。

その後の10年、不登校の数はさらに増え続けます。2016年に「教育機会確保法」が制定され、教育支援センターや不登校特例校、ICTを活用した学習支援、フリースクール、夜間中学での受入れなどを活用した社会的自立への支援などが謳われました。しかし、2022年度は、小中学校における不登校児童生徒数は約30万人となり、前年度比で22%も増加しました。現在、文科省は「COOLOプラン」（2023年）によって、1人1台端末を活用して、自宅をはじめとする多様な場を在籍校とつなぎ、オンライン指導やテスト等も受けられるようにするなどの施策を始めています。端末の活用によって心や体調の変化の早期発見を推進するなどもしています。

個々の子どもたちがなぜ学校に行けないのかと考え、子どもたちにあった多様な支援をしていくことは、かつては個人の資質の問題として切り捨てられたことを想えば大きな対応の変化です。しかし、文科省（文部省）の対応に一貫して欠如しているのは、不登校の子どもたちが「増え続けている」のはなぜかという問いです。日本の教育については、国連の子どもの権利委員会から「過度に競争的な学校環境」が問題であるという指摘を受けているにもかかわらず、文科省の対応には、学校や社会のあり方のどこに問題があつて不登校が増えているのかという視点がありません。そして不登校の子どもたちは増え続け、不登校の子をもつ親たちは、子どもとともに苦しみぬき、自分を責めぬきながら、「親の会」にやつの思いでたどり着くのです。

語るはじ、聞きつるはじ

私たちの埼玉県連絡会ができる前から、埼玉でも全国各地でも「親の会」ができています。「登校拒否はどの子どもも起こる」と言われるようにはなっているけれど、ではいったいどうしたらいいのだろうかとう悩んだ親どうしが結びつき始めたのです。

では「親の会」は何をしたのでしょうか。私の手元には、埼玉県連絡会が2015年に発行した「むらさきつゆくさ」の10周年記念特別号があります。この特別号には県内各地の「親の会」の皆さんからの思いが寄せられています。その中から「親の会」の様子を抜き出してみましよう。

□「子どもが学校に行かなくなった。どうしたらいい?」「私の子育てが悪かった?」「近所や親戚から責められる」「学校の対応に怒りがある」。それまで誰も話せなかったことを、涙ながらに話す人もいて、小さな市にも不登校に関する

親の会が切望されていたんだと実感しました。気がつけば11年たっていました。今だいたい数人から10人の参加者。自分の思いを吐き出して、同じ立場で聞かれる仲間がいることも必要だと、この年月を経て実感しています。

□「一人で悩まないで、一緒に悩みましょう」の合言葉で続けています。毎月第3土曜日夜の8時から我が家で行っています。会員制ではないので、参加は自由です。毎回6〜8人ぐらいで、じっくりと一人ひとりの話を大切に聞きますので、終わりは毎回深夜12時を過ぎてしまっています。

□月に一度、土曜日の夜に集まってしゃべるだけの親の会だからこそ、ここまで続けてきたのかも知れません。子どものよいうす、学校とのかかわり、夫や家族との対応、時には仕事の悩みや親の介護の話など、話しているうちに子どもの小さな変化や自分の生き方に気づかされ、なんだか元気になるのです。親の会で自分のことを話しているうちに、人の話を聞くことも上手になってくるから不思議です。誰もが体験者であるからこそ、うれしかったことでも間違ってしまったことでも、何を話しても共感してもらえら

らともに子どもを信じて待つことができるところです。私にとって親の会は今も私の居場所です。

□「子どもが」「夫が」と語り始める人たちが、何度も何度も語り合っているうちにいつしか自分の本当の思いを語り始める。語り合い、聞き合うことを積み重ねていくうちに、いつしか少しずつ「子どもは子ども、私は私」と感じ始める。「子どもに自己肯定感を」という思いから「私の自己肯定感は何？」と自分を見つめ始める。

「親の会」も埼玉県連絡会も「ひとりぼっちで悩まない」を第一の柱にしています。だからといって、「親の会」には特別なアドバイザーがいて処方箋をだしてくれるわけではない。共通するのは、参加した親が話し、それを皆で聞きとるという作業が延々と続けられていたということです。「お茶を飲みながらただ話を聞き合いました」という記述もありました。こうした「親の会」の蓄積のうえに20年前埼玉県連絡会が作られました。

私たちの活動で特徴的なこと

私たちの活動のなかでは「公開相談」は

とても重要な役割を果たしています。冒頭でご紹介した広木克行さんは2004年の結成総会に参加して下さいましたが、その際にも「公開相談」をお願いしました。毎年のように開催している広木さんの講演会は、講演会のあと必ず「公開相談」となります。

「公開相談」というのは、相談を集団で聞いて学ぶグループカウンセリングです。相談者は、会場で手をあげてその場で広木さんに相談をします。他の参加者は、自分も同じ体験をしたものとして、相談者に共感しながら話を傾けます。この共感があるから相談者も公開で相談できるので。丁寧に相談を聞きとった広木さんは、不登校に長年関わってきた経験を踏まえて、どうしたらいいかをその場で相談者とともに考えていきます。

広木さんばかりでなく、2か月に1回ほどでもっている例会にお呼びした講師の皆さんへの質問も、こうした「公開相談」になることが多いです。語り合い、聞き合うという「親の会」が作り出した知恵だと思います。

埼玉県連絡会は、県教委の生徒指導課に懇談の機会を設けてもらっています。県教委の不登校への対応について率直なお話を

させていたのですが、私たちは不登校の子をもつ親がどう感じているか、考えているかを理解していただくことを大切にしています。生徒指導課の皆さんは学校現場の経験のある教職員でもあり、私たちとの良好な関係性のなかで、不登校の子をもつ親の気持ちに共感していただけていると感じています。

また、埼玉県にはフリースクール、「親の会」などの当事者も参加する「不登校児童生徒支援のための官民連携会議」があり、『不登校の子供を支えるためのセミナー』を実施しています。当初「官民連携会議」は「児童生徒の登校支援会議」という名称で、子どもたちを登校させることを前提としていましたが、参加している当事者の奮闘で名称も変え、あくまで不登校の子どもたちの支援を目的とするものとなりました。私たちの代表として参加している皆さんに頑張ってもらっています。

その他、さいたま教育文化研究所の教育相談室との連携、教育のつどいや埼玉・協同して子育てをすすめる交流会、母親大会への参加などにもとりくんでいます。不登校の子をかかえて悩んでいるけれど、まだ私たちと出会えていないたくさんの方とどうつながっていくのかは大きな課題です。

最後に―教職員の皆さんへ

不登校にかかわって最近気がかりなのは、不登校がビジネスモデルになっていくことです。インターネットで「不登校」と検索すると、通信制高校やサポート校など不登校の子どもたちを対象にしたたくさん情報が出てきます。良心的なものもあるでしょうが、あらゆるものをビジネスチャンスにしていく新自由主義の流れのなかでは、不登校までもが儲けの対象となっていくと思わざるを得ません。また、「COO OLOプラン」が推進する1人1台端末を活用した不登校対策をはじめ、今学校には、「GIGAスクール構想」など、文科省ではなく、経産省経由の施策が多く入り込んでいくようで心配です。学校は大丈夫でしょうか。

だからこそ、教職員の皆さんには、地域の「親の会」や埼玉県連絡会の催しに是非とも参加していただきたいと思います。その場を仕切ったり、処方箋を提示したりするのではなく、お話の聞き手として、そして時には語り手としてそこにおいてほしいのです。私たちが手掛ける不登校の子どもたちとその親のための居場所『ひろば』の運

営方針は、「何もしない」です。居心地のよい場所を提供すること、「親の会」も埼玉県連絡会もそこから始まらなかったのです。

「親の会」や埼玉県連絡会で活動が続いている方が次のように言っています。「親の会の皆さん、連絡会の皆さん、出会ってくれて本当にありがとう!」。良い出会いがきつと待っていると思います。



わが子が不登校になって思うこと

森田朝野

起立性調節障害の診断

わが子が不登校になったのは、さいたま市へ引越し、転校した後のことです。その夏休み前から体調を崩しがちになり、毎朝の起床に支障が出てきて、10月に入ると登校がまったく困難になりました。その時の診断が「起立性調節障害」でした。

受診した小児科医Aさんには「薬の服用と合わせて、なるべく午前中起す、水分を多くとる、運動をする…など、いくつかの項目を守ってください」と指導され、数ヶ月薬を服用しながら、まず一つ目の項目の、午前中に起すことが大変難しい中、私はやっきになって起こしていました。あまりにも起きないので「こんなにも起きられないなんて」と毎日悲観していました。具合

はよくなるどころかさらに悪化して、やっとのことで起こしてもずっと具合が悪く、やりたいこともやれませんでした。また、よく話す子でしたがほとんど話さなくなり、部屋にこもることがおおくりました。その後に会った小児科医Bさんはご自分のお子さんが起立性調節障害になった方です。勤務している大病院の医師達に相談してもなかなかよくなりえずに悩んでいた時に、「試しにフリースクールの見学に行ってみるか」と聞いたところ、Bさんの予想に反して「行ってみる」といって、その後思いがけず通い始めたそうです。この経験をしたBさんは「医者私がいうのもなんだけど、この病気は（場合によっては）医者が治せるものではない、と捉えています」と話してくれました。「このままでは治る気がしない」という自分の感覚と重なり、

病院に行くことをやめました。それでも朝起こすことはやめませんでした。「まずは生活のリズムを正しましょう」という一般的なフレーズにみんなの疑いもたず、それだけが唯一、私にできることだと思っていました。

親の会との出会い

状態・症状が変わらない中、私はもしかしたら自分で行きたい場所、会いたい存在があれば起きていくのではないかと期待をしました。でもどの支援（学校の相談員、カウンセラー、地域の支援センター）も息子に響くものはありませんでした。人づてに知った「さいたま教育文化研究所」に、薬をもつかむ思いで相談し、そしてそこから今の連絡会の親の会に出会いま

す。親の会では、とにかく相手の話を良く聴きます。はじめての会でそれまでの経緯を話し終えると「毎日起こしていると言うけれど、それは本人に頼まれてしているの？」と問われ衝撃を受けます。「子どもの時間は子どものもの。起きる時間もその子に決める権利がある。無理矢理起こすこととはしない。明日起こしてほしいか、その都度聞いてみたら？頼まれた時だけ起こしたら良いし、もしその時起きられなくても否定しないこと」初めて耳にする発想に半信半疑でしたが、これを実行しはじめました。親の会では「子どもに寄り添う、子どもの丸ごとを受け止める。そして子どもの気持ちがあ動くのを待つ」これが基本です。「丸ごと受け止める」というのは、朝自分で起きられない、学校に行けない、勉強しない、ゲームばかり、やりたいことならやれるなど、そういう親にとって心配な要素に対して、否定しない、改善へと導かないことです。この基本を理解し実行することは簡単なことではありません。

「心配」を手離す

病院や一般的な解釈にはない、親の会の、当事者の発想が私達親子には必要だと感じ

ました。親はつい「学校に行けなくてもよいが、なんらかのかたちで勉強させたいとか、ゲームばかりにならないようにルールを決めようとか、勉強じゃなくてもいいからなるべく有意義に時間を使ってほしい」などと考えてしまいます。でもどれも本人の気持ちを無視した親のよかればかりです。これをすればするほど、そういう気持ちでない子どもを否定することになります。

「子どもに寄り添う、子どもの丸ごとを受け止める」というのは、親が「それいいね」と言える子どもの気持ちだけでなく、親が「いいね」とは言いがたい子どもの気持ち、そのどちらも、「今はそういう気持ちなんだね」と受け止めることだと教えてもらいました。これは言い換えると、子どもの気持ちがどんな時でも、特に親がネガティブに感じる時でも、親は子どもの考える力を信頼するということです。親がそうすることで、子どもは安心して悩みながら自分の今や将来のことを考えられるようになります。どんなつまづきを経験しても、自らの次の歩を踏み出せるようになるんだと思っています。「子どもの気持ちがあ動くのを待つ」というのは、心配のあまりに親が子どもの先まわりすることをやめることです。「元気になってきたのになぜ学校には行けない

の？少しは勉強できないの？」とこちらから聞いたりうながしたりしないことです。親の心配は子どもの力を信頼できていないことの裏返しです。つまり否定です。心配⇨否定があるうちは、子どもにポジティブな気持ちは生まれません。

このようなことは、はじめからそう思えたわけではありません。この考えに同意できない夫と何度もぶつかりながら、私自身も果たしてこれで大丈夫なのだろうかと思藤し、ゆらぎました。「心配」を手離すというのには、言葉にするのは簡単ですが、親にとつてはなかなか簡単なことではありません。葛藤し、気がつくともまた心配している自分にながかりしながら次の親の会に向く：そんな親同士で何度も語り合うことで、自分自身がいろんなことに気づけるようになり、その気づきをもとに自分の心配を手離してわが子を信頼できるようになり、そのことからわが子は心身健やかに、そして自分の気持ちをまた話すようになってきたのではと思つていきます。

転校前の中学校に再転校

家では健やかに過ごせるようになりまし

たが、さいたま市の中学校にはこのまま卒業まで行かないかもしれない、でもそれはそれで息子の選択を尊重しようと考えられるようになってきたころのことです。1年生の学年末にキャリアシートを提出することになり、その一番はじめの「将来の夢はなんですか？」という問いに「川越に住む」と書いてありました。体調がよくなつてからは土日は川越の友達と遊ぶ機会が増えていて、川越の中学校なら通いたいだろうか？それを叶えてあげるのはどうなんだろうか？という風に考えました。夫に相談すると、「もしその道もうまくいかなかったらどうするの？それこそ、また駄目だった！というマイナスの経験になつてしまふし、今土日に遊べている友達とも疎遠になつちゃうんじゃないの？」と反対され、それも一理あるかもしれないとわからなくなり、親の会に相談しました。何人かの方に相談しましたが、親の会の答えは一つでした。「その道がうまくいくかどうかなんて誰にもわからない。でも本人がもしそう願っているなら、その気持ちをくんで応援すること自体に価値がある。たとえその道がうまくいかなかったとしても、じゃあ次はどうしたらいいだろうと自分で考えられる、次に進める一歩になるよ」という答え

でした。おかげで私は自信をもってその道を応援しようと思えました。

川越市の教育委員会次第でしたが、受け入れてくれました。初めは住民票を移すことで転校、アパートを借りて住民票を移して転校しました。そのうち、親の会の方から川越の議員さんに、その議員さんから川越市教育委員会に働きかけてくださり、さいたま市の住まいから川越市の中学校に通うことが認められました。

あれこれ悩みながらも2年生の2学期に川越市の中学校に再転校したことで、2つの学校の違いを経験します。

さいたま市のC中学校では、一週間毎に授業の内容などプリント等で親の私だけ連絡をうけましたが、「今の状態（登校できない、課題・テストに取りくめない）のままだと評価ができません」のくり返しでした。それは本人の気持ちに寄りそうものではなくありませんでした。次年度の再転校の話が出た頃には、学年内の我が子の認識が共通内容として教師間になかったことに気づきました。

現在の川越市のD中学校の担任の先生は、「出席、勉強、部活、行事、進路、いざれも本人の気持ちを尊重します。本人の気持ち動くまで待ちます。自分は学校の

枠に子ども達をはめること自体、本当は違うと考えているし、枠にはまらない、はまらない生徒のチカラにもなりたいたいです」と言ってくれています。例えばテストを受けないと成績がつかないから受けた方がよい、というようなことは言いません（もちろんこちらがそれを分かっている前提ですが）。行事もみんなと同じように、とは言わずに、「もし参加するならどんな参加の仕方がよい？」と本人に聞いてくれます。校長先生は時間をかけて息子の様子や親の気持ちを聞いてくれました。そして「担任の先生だけでなく、他の先生を含めた学校全体でKくんのことをサポートしていきます」と考えています。

こういうD中学校の先生の捉え方、息子を持つ姿勢、そういうものが息子にも伝わるからこそ、息子は安心して休んだり、登校したりできるようになつたんだと思います。

本当の支援とは

これだけ不登校の子どもが増えているのに、不登校の子どもに対しての捉え方、支援の仕方が先生や学校ごとにバラバラなのが不思議です。さいたま市の先生と川越市

の先生で違ったように、先生の捉え方と支援の仕方次第で、子どもの様子はまったく違ってきました。学校や世の中にはまだまだ「悪気なく」間違った認識をもとに不登校を、子どもを捉え、支援しているつもりのところが多くあるように感じます。私達当事者とギャップがあるのは仕方ありませんが、だからこそ当事者の話をよく聴き、まず自分達の認識が合っているのか、理解に務める必要があると思います。

そして、一口に不登校と言っても様々な子ども、親がいることを知って頂きたいです。先生同様、親の捉え方も様々です。例えば、

- ①なんとか学校に戻したい
- ②学校が駄目でも、なんらかのかたちで勉強させたい
- ③学校に行けなくてもよい、勉強も本人がしたくなるまで待つ

私自身、①〜③のどの段階の時期もありました。同じ親でも段階によって違います。そして子どもの様子も様々です。

- ①部屋からほとんど出ない。親と一切口をきかない
- ②部屋からたまに出る、親と少しは話す
- ③家の中では普通、家の外には出られない
- ④家の中では普通、夕方、土日なら外に出

られる(まわりに学校はどうしたの?と聞かれないため)

などの段階があり、他にも親に暴言をばく、手が出るなど、様々な状況があると聞いています。これは親がどういう風に子どもを捉えて、どう接しているかが大きく関係していると思います。子どもにとって重要なことは「不登校」になる前にあったこと、そして「不登校」になって苦しんだ自分を安心して癒せる、安心して悩める、その環境と時間の確保なのだと思います。息子も私達の見方や接し方が変わったことで、今は平日の昼間でも出かけたい場所に出かけたり、D中学校に行こうと思えば行くようになっていきます。

今は息子が4月以降の進路決定に向けて真剣に考えているので、どんな選択をするか楽しみです。どんな選択をしても応援したいと思っています。

今相手がどんな気持ちか、どんな状態かを理解しようとする、相手を評価したり、心配することをやめて相手から話してくれるのを待つ。そして話してくれたときにはその話をよく聴く。これが支援の基本だと思います。※それは聴く側から聞き出す、聞いたですということとは違うということも合わせて強調しておきたいと思いま

す。

ねがいです

起立性調節障害や、不登校の捉え方や支援の違いについてふれてきましたが、もうひとつ肝心だと思うのは、不登校になる前についてです。なぜ子どもの不登校、ひきこもり、いじめ、自殺が増え続けているのか：今の日本の教育の在り方、例えば子ども達を人材と呼ぶ教育、子どもの権利や教師本来の意義を無視し、子どもや先生一人ひとり、教育現場そのものを大事にしない、そういうものが変わらないことには問題は解決しないと考えます。そのことに基づかる度に私にできることはとても微力だと感じますが、せめて何ができるんだろうかと考えた時に、私達親と教師、行政、地域、研究者、場合によっては医師とが連携することだと思っています。それぞれの立場で理解していることが違うのと、それぞれの立場から見える子どもの姿が違うのと、それだけにできる事、役割が違うからです。「子どもを真ん中に、違う立場の大人が育てていく」これが実現できたらよいなと思います。

(さいたま市在住)